
魔法少女リリカルなのは～騎士姫と最後の聖王～

crude

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 騎士姫と最後の聖王

【Nコード】

N3935M

【作者名】

crude

【あらすじ】

「シロウ、あなたを愛していました・・・」その言葉を残して、英雄の座へと還るはずだったセイバー、光に導かれた先には一人の女性がいた。彼女の願いでセイバーは新たな戦いの場へと行くのだった。

導かれた先は、リリカルなのはの世界。そして出会わなくては出会った新たなマスターである少年、神崎椿（かんざき つばき）今、運命の歯車が動き始めるのだった。

初めに・・・

初めましてc r u d eです。この作品『魔法少女リリカルなのは』騎士姫と最後の聖王』は、リリなのFFです。FFが嫌いや、原作どりの展開がいい。チートが嫌いだという方は即刻まわれ右でお願いします。そんなの気にしないよ！！という心の広い方どうぞよろしくおねがいします。

また、この作品にはリリなの以外にS H U F F L EやD・C・にプリンセスラバーが登場します。作者はどシロートゆえ見苦しい作品になると思いますがお楽しみいただけたらなあと思います。

でわ、魔法少女リリカルなのは』騎士姫と最後の聖王』お楽しみください。

プロローグ（前書き）

ついに始まる物語・・・

お楽しみください。

プロローグ

「大丈夫です。もう答えは得ましたから・・・」

柳洞寺の大空洞で英雄王とアンリ・マユを討ち聖杯を破壊したセイバーと衛宮士郎、二人の別れの時がやって来た。眩い輝きの中で二人は微笑み合っていた。そしてセイバーの体が透けていき・・・

「シロウ、貴方を愛していました」

とセイバーは言ってこの世界から消滅した・・・彼女が消滅してから士郎も

「俺も愛していたよ。セイバーのこと」

と誰もいないこの場所で呟いたのであった。

sideセイバー

光の中をぬけ、自身が居るべき英雄の座に戻るはずのセイバーは、何もない真っ白な空間へと導かれたのであった。

「お待ちしておりますわ、アルトリア・ペントラゴンいえ、セイバーというべきかしら？」

何もないはずの空間から声が響き同時に光が集まりその中から人が出てきた。

「あなたは、誰だ？なんの為に私をここに呼んだ？」

セイバーは身構え、エクスカリバーを手にもった。

「落ち着きなさい、セイバー。私の名前は、オリヴィエ、オリヴィエ・ゲーゼブレプトよ。貴方に大切なお願いがあったからここに呼んだの」

「お願いですか？」

怪訝な表情を浮かべながらもエクスカリバーを下ろすセイバー、そして哀しみに満ちた顔で、そう大切なお願いよ。と呟くオリヴィエがいた。

「で、その内容はなんなのですか？」

とセイバーが問うとオリヴィエは、重い口を開き

「私の一人息子を守ってほしいの。あの子が目覚めればきっと世界は、あの子を殺すわ。」

と言うオリヴィエに対してセイバーは、問う

「なぜ私なのですか？貴方の息子なのでしょう、母親である貴方が守るべきでは？」

と少し怒気を含んだ声色でオリヴィエに聞いたですが、

「出来ることなら私のこの手で守ってあげたいわ。自分の息子だも

の・・・でももう出来ないのよ。私はもう何百年も前に死んでいるから」

と言いオリヴィエは、自身の事や息子の事そして古代ベルカの時代のことを包み隠さず全てセイバーに語った。セイバーは、全て知った上でこう言った

「しかし、なぜ私なのですか？オリヴィエ、もしかしたら私が貴方の息子を裏切る可能性だってあります」

と真剣な顔をしてセイバーが言うと、オリヴィエが微笑んで

「私は、今までの貴方の戦いを全て見ていました。貴方のマスターに対する忠誠心から貴方の性格が滲みでているもの。それに貴方は強いわ、それでいて優しさも持ち合わせている。今のあの子には貴方みたいな人が必要なのよ、私ではなくてね」

「・・・」

セイバーとオリヴィエが無言で見つめあっていると不意にセイバーが、こう言った

「わかりました。オリヴィエ、その話受けましょう。私がこの剣に懸けて貴方の御子息をお守りいたします。」

セイバーが、オリヴィエの願いを聞き入れたのであった

「ありがとうセイバー。でも何故引き受けてくれたのかしら？」

「オリヴィエ貴方の瞳は、とても嘘をつく者の瞳ではない。それに

話を聞く限りでは貴方の判断は正しく無かったのでしょうか。しかし貴方のその御子息に対する想いは本物だ。それに、初対面なのに貴方は私の事を信頼してくれた」

涙を流しながらありがとう、ありがとうと呟くオリヴィエがいた。その姿は、聖王オリヴィエではなく一人の母親としての姿だった。

「貴方の御子息は私が、この命とエクスカリバーに懸けて守りぬきます」

と言葉を残してセイバーは、この空間から新しいマスターの元へと旅立ったのであった。

主人公設定とセイバーについて（前書き）

まだ、本篇に登場していない主人公とセイバーの設定集です。

主人公設定とセイバーについて

名前

かんざき つばき

神埼椿

身長

120cm

年齢

9歳

出身世界

一応ミッドチルダ

容姿

素晴らしい程の美形、金髪と翠と赤のオッドアイ

魔力

A-

セイバーとユニゾン時SS+（9歳の時点で）

バリアジャケット

セイバー・リリイの甲冑をスカートではなく、ズボンにして背中もはだけていない感じ

備考

古代ベルカの聖王オリヴィエの実の息子、ベルカ戦乱の時代に生まれるがオリヴィエによって封印されていた。

現在は、記憶を全て失っている。

この名前は、椿を発見した神埼夫婦によって命名されるが、その夫婦は椿を発見した後に謎の死を遂げている。

神埼夫婦が死亡した後に管理局の施設に入れられたが・・・

物語が進むにつれて設定の追加や変更があります。

名前

セイバー（アルトリア・ペントラゴン）

身長

：154cm B73 / W53 / H76

魔力

現時点ではAAA-

備考

第四次、第五次聖杯戦争を勝ち抜いたサーヴァントだが、この作品

では、サーバントとしてではなく椿のユニゾンデバイスとして登場する。

その他の基本設定は全て fate/staynight の設定と同じ。

騎士姫と聖王の出会い（前書き）

主人公初登場です。

そして初っ端からかなりの急展開かも・・・

では、お楽しみください。

騎士姫と聖王の出会い

今から3年前、僕は神埼薫^{かんざき かおる}・神埼初音^{かんざき はつね}夫婦に養子に迎えられた。記憶が無い僕にとっては、初めて出来た家族だったけど・・・別れは突然だった。薫さんと初音さんは、なんでも時空管理局なるものに勤めていて任務に出かけて行ったのだ。次に見た両親の姿は、無残なものだった。初音さんは、特に目立った外傷は無かったが、薫さんは酷かった。体のあちこちに切り傷や痣、拳句の果てには、左肩から先がぐちゃぐちゃに潰されていた。この日僕は、初めての家族を本当の家族になる前に失った。なぜなら、まだ薫さんを『父さん』初音さんを『母さん』と呼んでなかったから・・・。

それから僕は、薫さんと初音さんの上司のつてで、管理局のとある施設に入れられたのだったが、そこは、最強の魔導師を生成する研究所で毎日毎日激痛を伴う投薬や、肉体改造手術などの実験や戦闘訓練、素手で魔法獣との戦闘などを繰り返し大量の子供が犠牲になっているような場所だった。僕は、そこで3年間実験や戦闘を強要されたのだった。

そして、いま僕の運命を変える事件が、起きようとしていた。

SIDE???

「もう少しで、我々の長年の夢がかなう・・・」

「そうですね、この子が完成すれば管理局のゴミ共を抹殺して我々が、全次元世界を統べるのだ」

と白衣を着た初老の研究者が二人早いスピードでコンソールを叩き

ながら話している。その目の前の生体ポッドには、神埼椿が様々な器具を着けて眠っているのだった。

ヴィーヴィー

突然アラートがなり響き部屋に赤い警告灯が灯った。コンソールを叩くのを止めた2人は研究員に向かって

「何事じゃ？」

「まさかここまで来て失敗したのか？」

と問うた。

すると研究員がコンソールを叩きながら

「肉体および、バイタルに異常はないのですが、異常な魔力を放出し続けています。あと2分たらずで臨界値を突破します」

「なんじゃと！？そんなはずが・・・」

「臨界値突破しました・・・間もなく魔力の暴走が始まると思われます」

「もはやこれまでか・・・」

と深刻に話をしていると。アラートが止み警告灯が消えた

「こんどは何じゃ！？」

「判りません。しかし、バイタルおよび魔力に変化なしです」

すると突然生体ポッドが割れ椿が出てきた

「・・・・・・・・・・」

「成功したのか？」

「これで、我々の悲願が叶う」

と2人の研究者はそれぞれ言ったが

「魔力の限界値大幅に突破しています。これでは確実に暴走が起きます」

と研究員はいった。

SIDE 椿

何だろう？気持ち悪い・・・それに吐き気がする・・・

「・・・・・・・・・・」

SIDE ???

研究者たちは慌てていた。

「暴走じゃと？暴走による消滅しうる範囲はどうなっておる？」

「おそらくですが、半径数十キロの物質が全て消滅しうると推測されます」

研究員がコンソールを叩きながら答えた。

「なんじゃと!!? アルカンシエルではないか!!」

その時、急に椿が光を発しながら苦しみ出した

研究員の一人が

「り、臨界点突破！！暴走始ります！！」

ሕዝብ

「うわあああああ！！！！！！！！？」

という樁の叫びとともに研究所とその半径数十キロにわたる物質が消滅するとともに樁が正気を取り戻したのだった。辺り一帯が消滅したのを目の当たりにした樁は

「これは僕がやったのか……？」

と言つて氣を失うのだった。その薄れゆく意識のなかで椿は、光と共に現れた美しい金髪の女性、セイバーに抱き抱えられるのであった。

「何があったのか判りませんが、今はお休みください。マスター」

こうして騎士姫と最後の聖王は出会ったのであった。

ハジマリノウタ？（前書き）

だあゝゝゝすんません

テストやら何やらで大幅に更新出来ませんでした。この小説を見てくれている方申し訳ないです。

では、本編どうぞ。

ハジマリノウタ？

椿とセイバーが出会うほんの数十分前・・・

SIDE アースラ

「この航行も無事に終わりそうね」

彼女は、巡行艦アースラの艦長であるリンディ・ハラウン、若くして提督の座に就く女性だ

「ホントですね、今回の航行は、いつもにましてらくですしね」

彼女は、アースラのメインオペレーターのエイミィ・リミエッタリンディの息子であるクロノの学生時代からの友人である。

「艦長、エイミィ気を抜きすぎですよ。もっとしっかりしてください」

彼は、クロノ・ハラウン、リンディの息子であり若き執務官として将来有望だが融通の利かないのが玉にきずである。

「クロノ、少し気を張りすぎよ。偶には、気を抜くことも必要だわ」

「そうだよ。それに何かあってクロノ君がいれば大丈夫！なんて
ってアースラの切り札だもん」

「うふふ。そうねクロノが居てくれるから安心ね」

「なっ！？母さ…じゃなくて艦長まで。はあ」

クロノ…お疲れ様だね。こんな感じで和気あいあいな雰囲気で航行
が行われていた。

だが、この楽しい時間は音を立てて崩れることとなる。

ヴィーヴィー

アラートが艦全体に鳴り響くと艦全体に緊張が走った。

リンディの顔が真面目な顔に戻り、コンソールを叩いているエイミ
ィに

「状況はどうなっているの？」

と聞いた

「大規模の次元振を確認！！場所は、第34観測世界リアンフィーナです。」

とエイミイがコンソールを確認しながら答える。

「これより、現宙域から離脱します。総員は余波に備えてください。次元振終息後、クロノ執務官は現地に調査に出てもらいます」

リンディの的確な指示によりアースラは、事なきを得た。

「次元振終息確認しました。被害は、今のところありません」

エイミイの報告が終わると、リンディが

「では、さっそくだけどクロノ執務官を現地に派遣・調査をしてもらいます。ロストログアの暴発の疑いがあるので総員注意を怠らないよう。ではクロノ執務官お願いします」

判りました。では艦長、僕はリアンフィーナへ行きます」

「がんばってねえ、クロノ執務官」

と白いハンカチをヒラヒラさせながらクロノを見送ったリンディに

対してクロノが顔を赤くさせて出発したのは、また別のお話…。

S I D E E N D

所変わって第34観測世界リアンフィーナ

クロノが調査を始めてから、数時間が経ち何も成果を上げられずに捜査が続いていた時だった。森を抜けると、大きなクレーターらしきモノとそこにたたずむ女性と少年を見つけた。

「動くな！！時空管理局だ！！、そこで何をしている！！」

クロノがS2Uを構えていつでも戦闘に入れる準備をした。

「こちらに戦闘の意味はない」

金髪の女性、セイバーがクロノに言い放つとクロノはS2Uを下して女性の腕の中で気を失っている少年を見た。

「この惨状はなんだ？」

とクロノが問うと

「判りません、私も今着いたばかりです。それより保護を願います。マスターがこのとおり気絶しているので・・・」

とセイバーが言うと、上空にモニターがでてきてリンディが、

「判りました。保護を受け入れます、クロノ執務官。アースラまで連れてきてください」

といった。しかしクロノは、

「なっ！！危険すぎます艦長！！彼女たちが次元振を起こした可能性もあります」

と反論したが、当然リンディによって却下された。

この出会いによって、必然のように運命が回り始めるのだった。

ハジマリノウタ？（後書き）

更新できずすみません

感想もお願いします。

遅くなりましたが、ARTさん感想ありがとうございます。

では、また

ハジマリノウタ？（前書き）

今回は、かなり早い更新です。ガンバリました。

ではお楽しみください。

ハジマリノウタ？

ピッ、ピッ、ピッと規則的な機械音だけが耳に入る・・・

ここは、次元巡航艦アースラの医務室。様々な器具をつけられた椿が寝むっているのだが、夢に魘されているのだろうか、顔が歪んでいた。

SIDE 椿の夢

そこは、中世ヨーロッパを彷彿とさせる大きな城の中だった。そこには、女性とおそらく息子が遊んでいる穏やかな風景だった。

(ここは何処だろう…判らないはずなのに…なぜ…懐かしく思う?)

ザッ…

風景が変わり、美しかった城も街並みも見er影が無くいたるところから煙や炎が上がっていた。

「考え直すんだ!!オリ エ!!あの子はそんなこと望んではいない」

と男が強く言い放った。

「すみません…ク　ウ…もう決めた事なのです。私達のくだらない理由で始まった争いに優しいこの子　　を巻き込むわけにはいきません」

と悲しみや慈しみ、そして覚悟が詰まった声で言った。

「…それは聖王としての覚悟かい？オリ　　エ…君は王である前に母親だ！！その選択はおかしいだろ！？」

「分かっています。しかしあの子には争いのない世界で平和に過ごしてほしいのです…」

（つつ！頭が…割れる…何なの？これは…）

突然自身を襲った頭痛と共に夢が終わり、目覚めるときが来た。

SIDEアースラ・医務室

ピツ、ピツ、ピツと正確なリズムが室内を流れる。椿が寝ているベッドの傍でセイバーは、いまだ目覚めないマスターを心配そうに見ていた。

その場に沈黙が流れて数分…

「ここは一体？？僕はっ…」

あの事故が脳裏をよぎった。顔が蒼白し自然と涙があふれて我を忘れて取り乱した。

「マスター、落ち着いて下さい！！あれは事故です。マスターは悪くないっ！！」

意識を取り戻し泣きくじやる椿をセイバーが抱きしめて言い聞かせるように何度も何度も繰り返し「マスターは悪くない」といった。

「僕はっ…人を殺したっ！！ヒドイ人達だったけど、殺したくなんて…なかったのにっ！！」

それから少しだけ時間が過ぎ、椿も落ち着きを取り戻した。

「ごめん、もう大丈夫だよ…。そういえば君は？」

「申し遅れました、私はセイバー。マスター専用のデバイスと呼ばれるものです。すいません、マスターもう少し到着が早ければこのような事には…」

とセイバーは申し訳なさそうだった。

「もう過ぎた事だからいいよ。それより、本当に僕が君のマスターなの？」

と椿が問うと

「はい。貴方が私のマスターです」

と言った。

「うん、じゃあこれからよろしくね。セイバー」

と笑顔で言った。

「（その笑顔は反則です／＼）はい。私はマスターをまもる剣であり盾です」

と言い、少し和やかに話していたが

「どうやら目覚めたようだな」

と医務室のドアが開くと同時に黒髪の少年が入室をしてきた。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラウンだ。すまないが艦長が呼んでいるんだ。一緒に来てもらう」

と言ってきたため2人は、クロノに先導され艦長室へと向かうのであった。

ハジマリノウタ？（後書き）

まず、朱さん感想ありがとうございます。楽しんでみてくれていると幸いです。

次回は、アースラで事情聴取の回です。

駄文ですが、読んでくれてありがとうございます。

では、また次回に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3935m/>

魔法少女リリカルなのは～騎士姫と最後の聖王～

2010年12月19日10時27分発行